



ちばを慕い 親の思いに添って

創刊百四十年型



真にたすかる道を伝えたいと、実動に励む布教キャラバン隊参加者（福岡ブロック）

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

実に、天理王命、教祖、ちばは、その理一つであつて、陽気ぐらしへのたすけ。一条の道は、この理をうけて、初めて成就される。

『天理教教典』

年祭活動1年目、大教会では「とにかく動く」ことを目標に、にをいがけ・おたすけに努めています。登殿参列や布教キャラバン隊で勇みを頂いた教会長を先頭に、各教会では毎日のお願いづとめや身近な方へのおたすけと共に、おちばへと人を導き、真にたすかる道を伝えようと懸命に努力を重ねている最中です。

おちばは、人類の故郷であると同時に、すべてのたすけの根源でもあります。親神様・教祖は、私たち子供がおちばに帰るのを楽しみにお待ちください。そして私たちの誠真実の心に対し、不思議なたすけや自由の御守護をお見せくださいます。

「諭達第四号」に、「ちばを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける」とお示しください。ただ親元へ帰るだけでも親はお喜びくださいますが、さらにお喜びいただくためには、日々を「たすけ心」で通ることが大切です。

私たちが親の思いに添いきって全身全霊で人だすけに奔走する姿は、必ず大きな喜びへと繋がります。ちばへの思いを胸に、この句をたすけ心で全力で通らせていただきます。

正面四方

以前、「無縁死3万2千人の衝撃」というタイトルの番組を見た。無縁死とは、亡骸の引き取り手がなく、やむなく市区町村が火葬することであり、人間関係が希薄になり孤独に寂しく死んでいく人が、年間3万2千人いるという。

真柱様はある席上、「お道を信仰している者から、家族が仲良く日々を過ごさなければいけない。それが、土地所の陽気ぐらしの根本になる。更にそれを周囲に映していく。行き着くところが、世界一れつの陽気ぐらしに繋がる」と仰せくださった。

周囲に気を配ることは大切であるが、外に向けてだけでなく、我が家族に対しては、なおさら心掛けねばならない。教祖は常に、心を掛け、言葉を掛け、声を掛けておられたと、ひながたに拝する。混乱を極めた今の世の中に、このひながたを忘れることなく、真似をしてでも通らせていただきたい。

(竹)

《9月月次祭 挨拶》

教祖ひながたを意識して 真実誠の心でひたむきに

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、時旬の道の上にお励みくださいます、誠にご苦勞様です。まだまだ暑さも残る中をご参拝いただきまして、ただ今共々に9月の月次祭を勇んで勤めることができましたことは、大變ありがたい次第です。

今月は靈祭月に当たります。この道には初代の道があり、教会の初代は皆、偉大な道の先人であると考えています。教祖は御在世中、数万の人々をおたすけなさいました。その大半が道から離れていったのですが、残った一握りの方々は、たすけていただいた御守護を生涯の喜びとして、御恩報じの道へと進まれました。

眞明芦津の道の中でも数え切れないほどの人がたすけられたはずですが、やはり大半が切れてしまっていると思います。その中であって、御守護に感激をして、御恩報じの心でたすけ一条に踏み出してくださったのが、初代となられた方々でしょう。木々が生い茂る山の中へ分け入り、雑草を踏みしめながら、道なきところに道を付けたのが初代です。そして初代に続かれた先人の道もあります。道は歩いてこそその道であり、途中で歩く者がいなくなったら、再び雑草が生え、どこが道やら分からなくなります。私たちの初代や先人先輩が、途切れることなくた

すけ一条の道を踏みしめて歩み続けてくださったおかげで、今日のお互いの信仰があるのです。これを思うときに、初代や先人の方々の真心こもったご足跡に改めて敬意を表して、感謝の意を捧げたいのです。

初代や先人の方の足跡に想いを馳せるとき、御守護を頂いた事柄に目が行きがちですが、その奥にある相應のご苦勞やご苦心を汲み取ることが大切です。もちろん御守護に涙された日もあったでしょうし、その一方で、言うに言えない、泣くに泣けない日も過ごされたと思います。度々節を頂かれたでしょうが、節にこもる親心を悟って、節から芽が出る道を歩んでくださいました。そして世界一れつをたすけたいとの深い思召に応えるために、たすけ一条に通ってください、確固たる道を付けてくだされたのです。

こうした道すがらに想いを致せば、論達の中の「水を飲めば水の味がする」「ふしから芽が出る」「人救けたら我が身救かる」と教祖の3つのお言葉を、真つぶさに実行されたのが初代や先人の方々です。この3つのお言葉は、今の旬に辿るべきひながたの指針ですが、それはまた、初代や先人の足跡を踏ませていただくことでもあります。初代や先人の後に誇りを持って続くためにも、お示しくださる教祖のひながたを常に意識して、教祖百四十年祭への時旬の歩みを、真実誠の心でひたむきに歩ませていただきたいと思います。

さて、先程、「縦の伝道講習会」として増井真孝先生からお話を聞かせていただきました。論達の中で真柱様は、「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命

に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである」と、陽気ぐらしへの道を進めていく上で、代々と信仰の道を繋いでいく大切さを示してくださっています。

この中に「一歩一歩の積み重ね」とありますが、例えば暮らしの中で、言動を通して子弟に信仰を伝えていくことも一歩一歩の歩みでしょう。また信者さんの子弟が教会に参拝に来られたら、「こんにちは、よく来たね」と声を掛けて温かく迎えることも一歩一歩の積み重ねになると思います。また家族でおちばへ帰ることも、「こどもおちばがえり」などの育成行事に参加を勧めることも、大切な一歩一歩の積み重ねです。そこには育成する側も、何とかこの信仰の喜びを伝えたいという、折れない信念が必要であることは言うまでもないことです。

この一歩一歩を世代として捉えるならば、それは間違いなく次の代ということになります。30年先、50年先のことすら分からない私たちが確実に見えているのは次の世代です。次の世代に目を向けて、信仰を繋いでおくことが、私たちの一歩の歩みであると思います。今日聞かせていただいた講話の中には、なるほどと感じたところもあると思いますので、参考の一つとして信仰を子や孫に伝える努力をして、末代の道という親神様の思召にお応えさせていただきたいと思います。

来月は年祭活動一年目の秋の大祭です。実りの旬である秋の大祭を仕切りのめどとして、にをいがけに、おたすけに、丹精に、おちばへの真実の伏せ込みに、心勇んで共に精いっぱい努めさせていただきますように。

(要約)

立教百八十六年 九月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけたいとの深い思召から、温かき親心を以て成人の道をお導き下さいますと共に、つとめとさづけによって不思議自由のお働きをお見せ下され、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます御守護の程は、誠に有難く勿体無い極みでございます。私共は、日々賜る御守護を片時も忘れることなく、御恩報じに努め励まして頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを戴きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、九月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、日頃の御恵みに御礼申し上げますと、今日を楽しみに参らせて頂きました眞明芦津の道の子供達が、たすけ心を湛えて、心よりお縋りする眞実の状を御照覧下され、親神様にもお勇み下さいます、たすけ一条の御守護と喜びに溢れる時句の道の歩みをお連れ通り下さいますよう御願い申し上げます。

今月の月次祭には、少年会本部・増井真孝委員にご来会を頂きまして、「縦の伝道講習会」として神殿講話をお務め頂きます。お聞かせ頂くお話を糧の一つとして、末代続く道の御守護を頂けるように、道の子弟育成の上に心して取り組ませて頂きたいと存じます。

私共芦津に繋がる道の子一同は、日々の勤めに励み句々の御用に眞実を尽くして、教祖百四十年祭に向けて、只管に成人の道を進ませて頂く所存でございます。そして、年頭にお誓い申し上げます心定めの完遂を目標に、にをいがけ・おたすけに、おちばへのつくし運びに、心勇んで仕切り根性で努め切る決心でございます。

何卒、この心根をお受け取り下さいます、教会長、ようばくの実動するところに不思議やかな理をお表し下され、世界たすけの教線が日に月に伸び広がる喜びをお与え下さいますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

《9月月次祭神殿講話 縦の伝道講習会》

教祖のひながたを見つめ

子供を立派なようばくに育てよう

少年会本部委員 増井真孝先生

今日は、教祖のひながたに見る縦の伝道について、そして、増井家の信仰初代・増井りんの縦の伝道の姿について、思案致しますところをご相談したいと存じます。

教祖のぬくもりに抱かれ味わう

増井家の信仰初代、増井りんは、今から150年ほど前の明治7年10月、32歳のときに「ソコヒ」という病氣から両眼が全く見えなくなりました。それは、2年前の明治5年に、父と夫をわずか3カ月の間で立て続けに亡くし、女手一つで3人の子供たちを必死に育てていた中での出来事でした。

りんにとって辛く、先の見通せない、ただただ悲歎の涙に暮れている中であって、「大和の庄屋敷に

何でもよくたすけてくださる神様がいます。三日三夜の祈祷でたすかる」という話から、教祖の御存在を知り、教祖の教えを初めて聞かせていただいたりんは、「こうして、教の理を聞かせて頂いた上からは、自分の身上はどうなっても結構でございます。我が家のいんねん果たしのためには、暑さ寒さをいとわず、二本の杖にすがってでも、たすけ一条のため通らせて頂きます。今後、親子三人は、たとい火の中水の中でも、道ならば喜んで通らせて頂きます」と堅く心を定めて、おちばに向かって三日三夜のお願いをすると、不思議にも3日目朝、りんの両眼は以前と変わらぬ全快の御守護を頂いたのです。

りんは、あまりの嬉しさから早速、お屋敷へお礼詣りをしました。そして、教祖に初めてお会いしたりんは、その日以降、教祖を心からお慕いして、たすけ一条の道を通るようになったのです。

御存命の教祖を心からお慕いして、その日その日を教祖への御恩報じ一条につとめ、りんは97歳で出直しました。りんの心はいつも、教祖のぬくもりで満たされ、その生涯を、教祖への御恩報じに、誠実を積み重ねたのです。

この「教祖のぬくもり」を味わわせていただく上で、欠かすことのできない大切なことが、私は3つあると考えています。

まず、「教祖の御心をたずねる」こと。そして、「教祖がなされたことを具体的に知る」こと。さらに肝心なことは、「御存命の教祖を心から信じて通らせていただく」ことです。

教祖のぬくもりを味わい、御恩報じに誠を尽くすこと。これが私たちこの道を歩む一人ひとりの成人に繋がっていくのです。

親神様が結構に

お与え下されてある

本年の天理教少年会の活動方針に、「教祖のひながたを目標に教えを実践し、子供に信仰のありがたさを伝えよう」を定めています。

そして、「論達第四号」には、ひながたを辿らせていただく上での角目について、教祖のお言葉を3つ挙げてくださっています。

まず1つ目は「水を飲めば水の味がする」というお言葉です。このお言葉の全文は、教典にも教祖伝にも出てまいります。

世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。

このお言葉の最後の部分、「親神様が結構にお与え下されてある」、ここが一番の肝だと思えます。

考えてみれば、世の中に当たり前のことなんて何一つない。それ



は誰しもがよく分かっていることです。特に、現在の日本は何もかもが結構になって、それが当たり前になり、感謝や喜びが少なくなっている気がいたします。だからこそ、「親神様が結構にお与え下さりてある」ということ、親神様の御守護に目を向けること、これが本当に大事な信仰の基本だと思います。

御守護のおかげと気付く

私には現在、5歳の長女をはじめ、3歳の長男、1歳の次男の3人の子供をお与えいただいております。

長女は出産直前まで逆子が治らず、帝王切開で生まれました。そして次男は、生まれる前の検診で「こうしれつ口唇裂」の診断を受けて生まれてきました。口唇裂とは、現代医学でも不明なものが多くですが、子供がお母さんのお腹の中で成長する過程で、何らかの原因により、唇が繋がらないままに、結果として上唇が裂けた状態です。口唇裂は、日本人では500人の出産に1人の割合で起こっているとい

の出産を通して改めて気付かされました。このかりものの御守護を御守護として御礼申し上げることが大事だと気付かされたのです。おかげさまで、口唇裂の次男の唇は、今は手術を受けて、跡形も分らないほどきれいに繋がっておりますが、子供可愛い親心とは、こういうものなのかと、その親心の篤さを些かでも味わうことができました。

元一日の心定めの大切さ

そして、長男にお見せいただいた身上を通して、おさづけの理の尊さ、親神様の御守護のありがたさ、そして、元一日の心定めの大切さに気付かされました。

長男が生まれて4カ月ほどが過ぎた頃、長男に身上のお手入れを頂きました。それは、長男の全身に、見るも痛々しい湿疹が広がり、右頬には膿ができてつあったのです。すぐに長男を連れてクリニックで診てもらうと、先生は深刻そうな顔で、「これはアトピーです。それともかなり重症です。薬を出し

ますが、効くかどうか分かりません。効かなかったら、大きな病院を紹介します」と話されました。すぐにおさづけを取り次ぎ、そ

して普段、おちばで御用を勤めている両親にもその旨を電話で伝え、母が本部の御用を終えてすぐに教会に戻ってきて、「お息の紙」を渡してくれたのです。妻は母から「少しずつちぎって、患部に貼らせてもらうんやで」と教えてもらい、長男の膿んでいる頬に貼り、再び夫婦揃って、親神様、教祖にお願いを致しました。

翌朝、長男の頬に貼らせていただいた「お息の紙」をそっと剥がすと、夫婦共々、目を疑いました。膿が「お息の紙」にべったりと貼り付いていて、昨日あれほどひどかった頬の皮膚がきれいに繋がっていたのです。「教祖がたすけてくださった！」まるで本で読んだような鮮やかな御守護が目の前で起こり、驚きとありがたさで胸がいっぱいになったあの瞬間のことを、今でも鮮明に覚えております。増井家の初代は、目の見えない

ところを、教祖の教えを聞かせていただき、「今後、親子三人は、たとい火の中水の中でも、道ならば喜んで通らせていただきます」と心を定めて、たすけていただきます。りんは、自分一人がお道を通ると心を定めているわけではなく、家族のいんねんを切っていたために、親子で通らせていただくことを定めているのです。

長男の身上を通して、夫婦で話し合う中で、「これは私たち夫婦の心定め、家族の心定めなんだ」と、この元一日の心定め夫婦として思いを深めることができました。おかげさまで、長男の身上はすっかり治まっております。いんねんあつてお預かりしている子供を通して、私たち夫婦が育てていただいているなあと感じています。

ふしから芽が出る

2つ目は、「ふしから芽が出る」というお言葉です。

節については、おさしづに、ずつない事はふし、ふしから芽を吹く。やれふしや、楽し

みやと、大きな心を持ってくれ。

明治27年3月5日

とあります。ずつないとは「術がない、どうしようもない」という意味で、どうしようもないことは節であり、そこから芽が吹く。だからその節を楽しみに大きい心を持ってくれと仰せになっています。思えば、教祖の道すからは、節の連続でした。それも大きな大きな節が立て続けにありました。道が広がるにつれて増えてきた、さまざまな度重なる官憲からの迫害の中に、教祖は「ふしから芽が出る」と仰せになって、人々を励ましながら、御自身も勇んでお通りになりました。

人間、誰にも節がある。生きていけば、自身の事柄においても、家族や周囲の人を通じてでも、必ず出合います。身上や事情を前にしたら、落ち込みます。節はつらいものです。けれども教祖は、そのつらいことも受け取り方一つで、先の楽しみのためになるとお教えくださるのです。

節をお見せくださるのも親神様、

節を乗り越えさせてくださるのも親神様。肝心なことは、節をお見せいただいたときに、他人や周囲のせい、あるいは社会のせいにするのではなくて、この節は自分にとって何を教えてくださっているのか、そう我が事として受け止める。そしてその節は、一歩成人するための親神様からのエール、親神様からの温かい親心ゆえのものなんだということです。

親神様・教祖にもたれる心

先日、「全教会一斉巡教」の場で、ある女性に呼び止められました。その方は、ちょうど10年前の大縣大教会月次祭の4月24日、健康診断のつもりで東京の大きな病院で診てもらったと、乳がんとの診断結果を受けられたのです。

彼女は、「10年間、病状に特段の悪化進行もなく、結構にお連れ通りくださいました。この間、前大教会長様ご夫妻をはじめ、大教会長様にもおさづけを取り次いでいただき、時にはお話も聞いていただきました。本当に大勢の皆様の

真実のおかげです。ありがとうございます」と御恩報じのお供えを手に話してくださり、そして、「おかげさまで、これまでは自宅から少し離れた大きな病院まで通院して診断を受けていましたが、10年間、大きな異常もなく、親神様・教祖にお連れ通りいただいたおかげで、来月から近くのクリニックで、年1回の検診のみで済むように、御守護を頂戴いたしました」と話してくださったのです。

彼女は病気が分かって以降、所属教会がある山梨県まで、「東京から毎月欠かさず足を運び、十二下りのおつとめを勤める」という心を定めておられます。そして、夫に別席を勧めて、今、八席目まで丹精を重ねておられます。

さらに彼女は、「身上を頂戴したこと、ものの考え方、感じ方、日頃の行いまで、喜んで受け止められるように、行動できるように変わりました」と言われて、今も精いっぱい御恩報じに励んでくださっています。まさに「ふしから芽が出る」ごとく、親神様・教

祖にもたれる心をしっかりと培っておられることに、私自身、大変ありがたいなあと御礼を申し上げた出来事でした。

人救けたら我が身救かる

3つ目は、「人救けたら我が身救かる」というお言葉です。

おかきさげに、人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かるという。とあります。

どうでも人をたすけたいと思う心は、天に通ずる真の誠であり、その真の誠一つの理をお受け取りいただくことによって人もたすかり、また自分もたすけていただく御守護を頂戴できる、こういう意味のお言葉です。人も自分も、たすけてくださる「たすけ主」は、どこまでも親神様です。

どうでも人をたすけたいという心は、教祖の御心そのものです。立教以来、教祖の御心は、月日の御心そのままですから、ただ一条に、世界一れつの人間をたすけた一条にお通りくださったのが教

祖のひながたです。ひながたを辿るといふことの核心は、教祖のたすけ一条の御心を手本として、それに倣って、自分もおたすけをさせていただく、人がたすかるように精いっぱい誠を尽くさせていただくことです。

教祖の御心を手本に、目の前の困った人に、一生懸命自分のできる何かをさせていただく、心を尽くさせていただく。そうすれば、教祖がお働きくださる。教祖は御存命だから、いつでもどこでもたすけてくださるのです。

縦の伝道の主軸は親

二代真柱様は、縦の伝道の主軸は、主な軸は親であります。

(天理教少年会第一回団長講習会)と仰っていますが、やはり、信仰の喜び、ありがたさを子供に伝える上で、親の影響は大きいものがあると思います。

それは、増井りんも同様で、子供に信仰の喜び、ありがたさを伝えていく上で、りんの「わが子、

孫にも徳を積ませてやりたい」との思いがうかがえるエピソードがあります。

教祖御在世の当時、中南の門屋をくぐりぬけた東側に「唐臼^{からうす}」がありました。唐臼とは、てこの原理を応用した足踏み式の臼で、臼を地面に埋めて、てこを利用して杵を足で踏みながら、穀物を搗くのです。お屋敷では、その年に収穫した麦を、この唐臼で搗いて脱穀し、そして炒^いった麦を石臼で挽いて、散葉、つまり、「はったい粉の御供^{ごぐ}」としてお使いになられていました。

りんの手記にその様子が繊細に記されてあります。手記には、「できあがった麦の粉を、りんと息子の幾太郎との二人で、教祖の御前まで持ってまいりましたら、教祖御自ら、お砂糖と麦の粉を混ぜ合わせられた」とあります。このはったい粉の御供は、古くからお屋敷でお渡しになられているのであります。が、史実を繙くと、明治11年頃には、御供は、はったい粉から金平糖に変わるのです。

増井家、明治7年の入信のとき、長男の幾太郎は12歳です。のはったい粉の御供をお渡しになっていた明治11年頃、幾太郎は16歳頃の年齢です。手記には、「そんな年齢の息子・幾太郎とおぢばがえりをするたびに、唐臼で麦を搗いたり挽いたり、はったい粉の御供にまつわる御用のお手伝いをさせていただいた」とあります。

子供と一緒におぢばに帰って、ひのきしんをさせていただくこと。子供の幾太郎の心にも、親と一緒にあって、ひのきしんに励み、そうして徳を積ませていただけたことは、その後の人生にも大きく影響を与えてくれたものであります。よう。そして何より、親であるりんの喜びのほうこそが大きかったのだと思います。

縦の伝道は、この道を信じる誰にとっても大切な御用です。お互いに、道に縁ある子供たちをしっかりと見つめて、立派なようばくに育てて、共に陽気ぐらしの喜びを味わわせていただきますように。

大教会秋季霊祭執行

9月24日、大教会神殿、祖霊殿で秋季霊祭が厳かに執行された。

午前10時より神殿の儀で十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀。大教会長が祭文を奏上。祭員列拝の後、在籍者、教会長、各会の代表者と新たに合祀を願ひ出た2柱の関係者が祖霊殿前に参進し、参拝した。



秋季霊祭合祀

祭典終了後、大教会長が挨拶。「道は末代と言われるが、それぞれの初代があつてこそ、この道に繋がっているお互いであり、歩いてこそ道である。先人がしっかりと道を歩んでくださったおかげで、今がある。親々、先人たちへの感謝を忘れてはならない」とした上で、「私たちも、今の道をしっかりと歩ませていただき、次代へ繋いでいくことが大切」と話された。

9月24日、秋季霊祭において新たに合祀されました。

西本菊江之霊

大教会婦人

尼崎分教会五代会長

久米輝彦之霊

明高分教会三代会長

大教会長夫人・井筒年子様は、

立教186年9月9日付で、

別席取次人となりました。

立教百八十六年 秋季霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様をはじめ、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊藏の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようばく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し合わせて祀る大教会婦人・尼崎分教会五代会長西本菊江の霊様、靱部属明高分教会三代会長久米輝彦の霊様、併せて壹千五百九柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

御本部四柱の霊様には、道の芯として幾重の道中も神一条に御丹精下され、温かき親心を以て道の子をお導き下さいました。お蔭をもちまして、今日のたすけ一条の道がございます。

又、初代梅治郎の霊様には不思議なお手引きによりこれの御教えの道にお引き寄せ頂かれ、教祖の御慈愛溢るる親心にお導きを頂いて御恩報じにお通り下され、道のために眞実の限りを尽くして、眞明芦津の道の礎とおなり下さいました。又、夫々の霊様には親神様のお手引きのまに／＼眞明芦津の道の草分けの頃から、ならん中をも誠眞実を尽くして神一条にお通り下され、或は国処々に在つては、幾多苦勞の道中も心勇んでたすけ一条にお励み下さいました。これの道が年限と共に結構な理をお見せ頂き、幾重の事情も乗り越えて、今日も変わらず教え通りに通らせて頂けますのも、親神様、教祖の厚き御守護、深き親心の現われではございますが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた眞実の賜物と、感謝の念で朝夕一心に御礼を申し上げております。その中にも今日のこの日は今年の秋の霊祭を執り行う日柄でございますので、御前に種々の心尽しの物を供え、在籍者をはじめ、参き集う人々と共に、霊様方のご遺徳を偲び、ご生前のご丹精を改めて厚く御礼申し上げます。

私共をはじめ、眞明芦津に繋がるようばく一同は、霊様方が歩まれた道すがらの後を誇りを持って続かせて頂き、感謝と喜びの心で、三年千日の時句の御用を一手一つに心勇んで勤めさせて頂く所存でございます。

何卒一同の道に尽くす眞実を御心安らかにお受け取り下さいまして、旬に相應しい心の成人をお導き下され、陽気世界への足取りを勇んで進ませて頂けますようお願い守りの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。



おやさとしん
青年会ひのきしん隊

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は9月9日、また9月16日から18日まで、おやさとしん青年会ひのきしん隊に入隊した。

9日の家族入隊では、3家族17名が入隊。家族入隊は、各直属分会で年に1回入隊日が定められている貴重な日であり、既婚女性や子供たちも入隊できる唯一の日でもある。

この日のひのきしんは、第38母屋でのシート交換。家族

揃って和気あいあいと楽しみながらおちばで伏せ込み、参加者には、かんろだいのお下がりが配られた。

続く16日から18日の3日隊では、青年会員延べ12名が入隊した。17日は青年会の実動日として、午前は詰所で会長宅中庭の清掃ひのきしんを行い、午後からは桜井市に移動して神名流し、戸別訪問など布教に勇んだ。

雅楽総合練習

祭事部雅楽掛（奥田眞治掛長）は、9月21日、詰所で泉裕一先生（亀岡部属・義立分教会長）をお招きして、今年

2回目となる雅楽総合練習を行った。

午前10時に2階大広間に集合しておちばを遙拝。筆策・龍笛・箏のパート別練習に励



教務部報

んだ。その後、昼食を挟んで合奏練習を行った。

今回の総合練習は、月次祭や秋季霊祭の祭儀で奉奏する曲を中心に、沓越調の春鶯囀、颯踏・同入破・賀殿急・胡飲酒破・迦陵頻急の5曲を吹き込んだ。

修養科第985期修了

林 昌子（山城谷）

立教186年9月27日

おさづけの理拝戴《8月》

日攄みちる（鎮名）
奥 梨香（二名）

信坂 幸（大眞永）

〈拝戴日順 3名〉

初席《8月》

〈2名〉 白野江

〈1名〉 東大屋、順世、大島

美和名、芦美屋

〈順序運びより 7名〉

月例統計（自令和5年1月1日～至令和5年8月31日）

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	9	9	2	
東 教 会 (13)	1		1	
津 野 川 (23)		1	1	2
吉 野 川 (29)	2		1	
島 原 (16)	5	2	1	2
日 方 (15)	3	1	2	4
稗 島 (7)	4			
本 津 (2)				
日 始 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)	3			
門 司 (6)	2	2		2
當 別 (6)				
大 島 (26)	17	1	2	
沖 縄 (3)	1			
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 (1)	1			
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)	1			
甲 邊 (1)		1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	1	2		
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)	1			
兵 庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)	4			
本 明 勇 (2)	2			
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	1	2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)		1		
眞 明 彰 化 (2)	1			1
本 氣 (2)	1			
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	60	22	10	11